

---

# 黒猫のひだまり

春蘭

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

黒猫のひだまり

### 【コード】

N3088B

### 【作者名】

春蘭

### 【あらすじ】

黒猫を不吉と言った人間。自分達は嫌われ者と言ったカラス。ボクを可愛いと言った女の子…。今日はきつと、いい夢が見れるだろう。

その日は、陽射しが穏やかな秋晴れだった。君はボクの前に、現れた。

### 黒猫のひだまり

使われていない稲畑、敷かれた藁に温かみを感じ、ボクはその上で丸くなった。時々吹き抜ける冷たい風がボクの黒い毛を撫でる。

「あ、見て黒猫」

「本当だ、不吉ー」

上から聞こえる声に耳をかたむければ、そんな言葉が出される。

不吉？ ボクが？

不思議に思い声のした方を見上げれば、そこには誰も居なく、少し遠く離れた所に人間の後ろ姿がふたつ見えた。

バサッ

そんな音が鳴ったと感じると、全身を黒に染められた大きな鳥がボクの隣に着地する。

カラスだ。

ボクはこの生き物を知ってる。大きなクチバシと翼を持ち、よく綺麗なものや鳩を追い掛けている。そういえば、前に仔猫がカラスに追い掛けられてるのを見た。

「うわ、カラスと黒猫が一緒にいるよ。」

軽蔑めいた声。まただ、また人間。チラリと横目で見れば、嫌悪の瞳。ボクはこの瞳の色が嫌いだ。でも、こんな瞳で見られる理由が分からない。

ボクとカラスが一緒にいるから？ そんなにいけない事なのかな。

ボク等の共通点なんて、黒ということだけなのに。

隣のカラスをジッとみつめる。その視線に気付いたのか、カラスはボクを見た。

「なんであんな風に言われるか、不思議かい？」

ボクの疑問をすくいとる様に、カラスは尋ねてくる。ボクは黙って、控え目に首を縦にふった。

「黒猫とカラスは昔から嫌われ者なのさ」

「でもボク何もしてないよ？」

「人間とはそういうものだ」

そう言っただけカラスは、漆黒の翼を羽ばたかせ、空のかなたに消えていった。

ボクはそれをしばらくみつめ、再び身体に顔をうずめる。緩い陽射しに包まれながら、カラスの言った言葉を思い出す。もしその言葉が本当なら、人間はなんて理不尽な生き物だろう。黒いつて事だけで嫌われちゃ堪らない。

ボクには人間の心が一生理解できないだろうな。

誰に主張するわけでもなく、心の中で呟く。

あたたかな日溜まりに、だんだんと瞼が重くなる。少し冷たい風を感じながら、甘い睡魔に誘われ、ボクは瞳をふせた。

「ニャーニャー。寝ちゃってるのかなあ？」

どのくらいたっただろうか。高いソプラノ声に眠っていた意識が戻る。その声が自分に向けられたものだと思いつくのに、少し時間がかかった。

だれ？

片目だけで見上げると、ある程度距離のある位置に一人の女の子

がしゃがんでいた。

「かわいいな、野良猫？」

首をかしげ、キラキラと瞳を輝かせながら尋ねてくる。

かわいい？ ボクが？

さっきの人達と言ってる事が逆だ。

「ボクは不吉の象徴なんだろう？ 君はボクの事が嫌いじゃないの？」

「んー？ ハイハイ。かわいいな」

ボクの言葉が通じないのか、まったく見当違いの答えが返ってくる。

その女の子は、ボクに近づく動作はしなかった。ただずっと、一人で話してるだけ。ボクが時々返事をする、嬉しそうに笑った。その笑顔は、嫌いじゃない。お日様みたいに、ぽかぽかするから。

「首輪してないけど、どこの猫ちゃん？」

ボクがそれに答えたって、君は理解できないじゃないか。なのに、なんで色々尋ねてくるのかな。

真上にあつた太陽は、いつのまにか、西方へと移っていた。そろそろ風も冷たくなる。ボクは軽く伸びをし、欠伸をひとつこぼした。「寒っ…風吹いてきたし、帰らなきゃ」

女の子はそう言って、立ち上がった。ボクは天を見るくらい首を曲げなきゃ、女の子の表情が見えない。

帰るのかあ。

悲しいと感じたわけじゃないけど、少し名残惜しいな、なんて思った。

女の子は、着ている上着の前のボタンを留める。そして、ボクの方へと歩み寄り、手を伸ばした。触れられる事に不慣れな為か、嫌と思ったわけでもないのにボクは素早く身体を起こし、女の子の手を避けていた。

「あらら…、まあいいか」

そう言っ君は笑ったけど、それはどこか寂しさがみえるだった。

触れるものがなくなった女の子の手は、しばらく宙をさまよい、お  
ずおずともとの位置に戻される。

ボクは、後悔した。なぜか、なんて聞かれたら困るけど。

オレンジにそまっていく空。女の子はそれを少し上目に見てから、  
ボクに背をむける。

「帰るの？」

ボクが尋ねると、それに反応したのか、君は遠慮がちに振り返っ  
た。なにか言いたげに、視線を泳がせる。ボクはちよこんと座り、  
女の子の言葉を待った。

「えっと…名前分らないから、なんて呼べばいいんだろう。黒猫  
ちゃんでもいいかな？」

そのままじゃないか。そう思ったけど、初めてつけられた名前に、  
ボクは少しだけ嬉しくなった。少しだけ、だよ？

「ばいばい。…それから、また明日。ちゃんと来るから、待ってて  
ね」

女の子は破顔してそう言い、ふんわりとしたスカートをはひるがえ  
しながら、沈みかけた太陽へと走っていった。

行っちゃった。

取り残されたボクは、女の子の走る姿を見えなくなるまでみつめ  
る。少しずつ、それでも確実に女の子の姿が遠くなる。ちよつと、  
切なかった。

「やあ、なにを話してたんだい？」

いつから居たのか、カラスがボクの側に寄り、興味深げに聞いて  
くる。

遠くに行ったかと思ってたのに。

だけどボクは何も質問しなかった。さして気になるわけでもない。  
猫はそういう生き物。

「あの娘、ボクをかわいいって言った」

畑に敷かれた藁の上を歩きながら、答える。カラスもボクの後についてくる。

「ほお？ また物好きな人間だな」

「物好き？」

「変わり者って事」

「ふうん……」

そうか、あの娘は『物好き』なんだ。

黒猫は、不吉。嫌われ者。そんなボクをかわいいと言う君は、変わってるんだって。

でもボクは、嬉しかったよ。こんなボクに、笑顔でまた明日、って言ってくれた。大きな夕日を背景に、優しく微笑んでくれた。

ねえ、ボク人間を少しだけ、好きになった気がするんだ。

空はオレンジと青が混ざり合い、一番星が輝いてた。寝所を探し、あてもなく道を歩く。

未だについてくるカラス。身体を凍えさせる夜風。保証のない約束。消えそうな三日月。

今夜はきつと、いい夢がみれるだろう。

(後書き)

愛して下さいなんて言わない。でも、嫌いにならないで。痛んだ心を、癒してくれますか？

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3088b/>

---

黒猫のひだまり

2009年5月29日04時20分発行